

小説

癩病棟

中村豊秀



小説 癩病棟

定価 450 円

昭和46年 6月15日発行

(検印廃止)

著 者 中 村 豊 秀
東京都東久留米市幸町 2 の12の16
発行者 唐 澤 禮 佑
発行所 株式会社 桃 園 書 房
東京都千代田区神田司町 2 の 5
電 話 (294) 2501~6
(郵便番号 101)
振替東京 3310
印刷所 弘 済 印 刷 株 式 会 社
株 式 会 社 技 報 堂
製本所 株 式 会 社 国 宝 社

落丁乱丁の場合はお取りかえいたします

0293—0014—5107

© 中村豊秀 1971

小説 ^{らい}癩 ^{びよう}病 ^{とう}棟

中 村 豊 秀



桃 園 書 房

カバ―装丁
秋吉

替

小説
癩^{らい}病^{びょう}
棟^{とう}
中村豊秀

癪者たち

二月の声をきいたばかりだが、春の早いこの島には、すでに梅の花が咲ききそっていた。黒潮をこえて吹いてくる南東の微風は、わずかな湿りをふくんでいてあたたかい。まだつたない鶯の声が、雑木林と松の疎林のなかからきこえてきていた。

——島の東端の高台に、海を背にして慰霊塔が建っていた。かなりの大きさで、人間の終焉の姿を誇示するかのよう、赤松の樹間に聳えていた。慰霊塔は九輪の塔と納骨堂とからなっている。いずれも青銅製だったが、四十年という年月に蒼錆びて、この島に住む癪者たちの肌のように黒ずんでいた。

九輪の塔のいただきには宝珠が飾られているが、輝きはすべて失われていた。それから下部へ、竜車、水煙、九輪、請花、伏鉢、露盤とつづき、その下が三層立方ほどの真四角の納骨堂になっていた。納骨堂には観音開きの鉄扉がついていて内部に出入りできるようになっている。鉄扉には大きな南京錠がしてあるが、鉄扉も錠も腐蝕していたからもうその役目は果たしていなかった。鉄扉はいつもだらりと黒い口を開けていて、そこからうす暗い納骨堂のなかが見えた。内部は三方に何段ものこまかい棚がしつらえてあって、何百何千とも知れぬ骨箱がほこりにまみれて積みかさねられていた。

骨箱はタバコふた箱ほどの大きさで、それぞれに死者の姓名と世を去った年月日が墨書されていた。慰霊塔は療養所の建物とも患者や職員の居住区域ともかなり距たっていて、いつも森閑としていた。そこは小山を整地して広場にしたものだが、一面の杉苔におおわれていて厚い敷物のように足音もたない。

慰霊塔をかこむ赤松は、海からの風に虐げられて、一本残らず北向きに傾いていた。

南は海だ。それも数百坪にわたって高さ三十余坪の断崖となっていて、ここに立つと目が眩んで平衡感覚を失う。

患者たちはなぜか島内でも慰霊塔附近を好んだ。不自由なからだをわざわざここまではこんできて、なにをすることもなく腰をおろし、二時間も三時間もぼんやりとそこにいる者もある。

ここからは茫洋と展けた海が見える。陽あたりもよく、外洋をゆく船を眺めながら思い耽ることもできた。

——その日の昼さがり、鴨下健也はゆっくりした足どりで慰霊塔のまえにやってきた。痩せた長身だった。頭髮も眉毛も腿もまだはつきりと彼の顔面にあったが、その表情は凍りついたように動かなかった。

鴨下は見るともなしに慰霊塔のあたりに視線をやってから、海にむかって腰をおろし、ズボンのポケットからタバコを出した。やはり左手の指は第二・三関節のあたりから数本脱落していて、残された指は松の木の瘤のようにかたくにぎりしめられていた。タバコに火をつけるのにもかなり不自由そうだ。

鴨下がここにやってくるのは珍しいことではなかった。ほとんど毎日のようにやってきては海を見てゆくのであった。彼がそこでなにをかんがえ、なにを思っているのか、それはだれも知らない。また、知ろうとする者もない。

この島にきてすでに三十年にもなる療養者。鴨下のようにまだ二年にしかならない者。女も、少年も少女にも、それぞれの来しかたがある筈だった。しかし患者同士はまるで不文律のようにそれぞれの内面に触れてゆくことはしなかった。だから、彼ら自身が自分からすすんで喋ること以外には、個人のことにについてはなにもわからない。

癩者には幾つかの名があるといわれていた。むろん、療養所を管理し、患者を入園させてきた職員たちは、患者の出生地や経歴も知っている筈であったが、それすらも正確な記録がなされているとはかぎらなかつた。患者自身が仮りの名を名乗り、虚偽の出生地を名乗っているとしたら、正確なことはどこからも知るすべはない。浮浪中の癩者が路端で捕われて、うむをいわせずこの島に収容されてくるようなことも、幾度もあった。

どう偽わる方法もなくして正しい住居氏名でここにはいつてきた者も、いったん入園すると療養者間では仮りの名を名乗った。そうして彼らは自らがもはや一般社会の普通の人間ではないことを自覚するのであった。そのようにして血の通いあう人間や知己に累のおよぶことを防ぎ、断絶のなかに潜んでゆくのもあった。

そんな悲しい知恵は、すべて一般社会の健康者がもっている偏見が教えてくれたものであった。それでもしなければ、病むものだけではなく、一族係累の生活さえもまともではなくなってしまうのだっ

た。そのため、患者自身が一般社会との交わりを断つ場合が多かったが、患者の肉親側からの断絶も冷酷に為された。

偏見——それは癪を病む人々を汚物と観る。親子、兄弟の交わりも、友人知己の交友も、夫婦、恋人としての結合をも、破壊し去らずにはいない。

鴨下健也も癪を病む人間のひとりだった。だから、彼がどこでなにをしていた人間だったか、それは詳らかではない。現に、彼の本籍地はこの島にあった。入園と同時に自分からその手続きをとり、一般社会との交わりのすべてを絶った。しかし、そういう隔絶の手段をしたといっても、社会への憧れのすべてを絶つことはできない。顔を見たい人間もあり、語りあいたい相手もあって、ときに、激しい『娑婆』への衝動に憑かれ、動揺もした。

そんなことは彼だけではない。すべての療養者がここを出てゆきたいと思っていた。死ぬまでこの島にいる。思ってもたまらないことなのだ。終身刑という刑罰にさえ国家や皇室の慶事による減刑があり、老いて仮出獄の希望もあつたが、癪を病む者にはそのような希望はなかった。

不断に死と直面していることの苦悩。監獄に距てられている以上の絶望感。それを刻みつけた癪者の表情は暗い。そうしてその立ち居ふるまいはもの憂い——。

——慰霊塔をうしろに眼下の海を黙然と見ている鴨下の姿からは、ぎりぎりの空しさが感じられた。「またここですか……」

「……………」
うしろから、足音もなくやってきた人影に声をかけられても、鴨下は小さくうなずいただけであつ

た。人影は鴨下をおどろかせないために、わざとから咳をひとつしてからやってきたのだが、その咳は異様な余韻をひびかせていた。ひゅうつ、と、まるで電線にあたる木枯らしのような音は、これが人間の発する音声なのであるかと疑われるていのもの音だった。癩菌がのどを冒しているのだ。

彼が秋田弘という中年の患者であることを鴨下も知っていた。住んでいる療はちがうが、ときどきこの場所以外でも顔をあわせていた。なにかの機会に秋田がまだ四十になったばかりだときいたときには、鴨下はにわかには信じられなかった。秋田は一見六十にも七十にも見えたが、正直なところ癩を病む者の年齢は当人以外にわからない。老いて白髪となり、肌にしわが増し、腰が曲がり、年齢相応の声になるといった常識はなにひとつ通じないからだった。

秋田の頭はつるつるに禿げていた。いや、実際には静脈が浮きあがったところだけに、わずかな毛が線状に残されてはいた。鼻は落ち、ふたつの鼻孔が黒い点のようにはっきりと見えている。顔面はいちめんのケロイドで赤黒い光沢をもっていた。手首は両方ともなく、白濁した視力の弱い目は、どこを見ているともわからずまだ余命を保っていたが、たえず涙がこぼれていた。ほどなく失明するであらうことが想像された。

鴨下はそばに秋田が腰をおろしたことに、もべつに関心をしめさなかったが、タバコに火をつけると秋田の口に唾えさせてやった。

「すみません……」

ききとりにくい声で秋田は礼をいって笑ったが、それは笑顔ではなくて、ひきつれた顔がただ歪んだだけであつた。

秋田はうまそうにタバコを吸った。そうして長い灰を首を振って落とした。啞えたきりでタバコを手にはできないのだ。

風が出て、沖がいくらか波立ってきているようだ。

慰霊塔の下の方に、リヤカーが通りかかった。一台に五、六人の患者がたかって、口々になにか喋りながらゆっくり動いていた。手や頭にまきつけられた大きな包帯が鴨下の位置から白々と見えた。半数の女がまじっている。患者の軽作業の一団だ。現金収入というものの乏しい彼らは庭掃除などの軽作業に出て、園から支給されるわずかな労賃で、不足しがちな日用品などを買っているのだ。

その金も通貨ではなかった。園内だけで通用する金額を書いた紙きれである。

軽作業の一団は、たぶん鴨下や秋田の姿を見たのであろう、彼らもそこにリヤカーを止めて思いおもいの場所を占めて憩った。

タバコの煙りが見え出し、雑談の内容もきこえはじめたが、話題は、食物のことと、猥らでなまなましい男女のいとなみのことばかりであった。

その一団のなかから声があがった。といつても、とくにおどろいたという声ではなくて、最初の発見者が最初であることを自慢しているような、その声だった。

「B 29だ——」

その声につれて、何人かは南の上空に目をやった。

爆音はキーンとひびく金属性の音で、徐々にこちらへ近づいてきていた。近づくにつれて、それが

数十機の飛行機の大編隊であることがわかった。

「ここへ一発、どかーんと落としていってくれんかなあ」

冗談ではなく、切実な感情のこめられた声でひとりがいった。

「爆弾がもつたいないとよ」

まぜっかえした男の語尾がため息にかわって、あとには白けた思いだけが残された。

「あら、もうすみれが咲いているわ……」

飛行機のことなどまるで眼中にない女の声が、わずかな喜びをふくんできこえてきた。ひとりだけわざと離れて、陽だまりにすわっている女の口からだ。彼女も視力がおとろえているのであろう、鼻を地表にすりつけるようにして、咲いているというすみれを見ている。

爆音がきゅうに大きくなって、B 29の姿が洋上いっぱい点々と見えはじめてきた。

「十、十六、二十五……」

ゆっくりと立って、ひとりが飛行機の数を読みはじめた。

戦争も末期に近づいていることが、口にくそ出せないがだれにもわかっていた。それも日本が敗れ去るのだという帰結しか想像できなかった。

アッツ島の日本軍守備隊の全滅を皮切りに、マキン、タラワ両島の失陥。米空軍による北九州の初空襲。サイパン島の陥落。グアム島も奪いかえされた。伝えられるものはすべて敗報だった。やがて

サイパン基地から米空軍のしらみつぶしの日本本土空襲が開始された。

この島はちょうど、京浜地帯にむかつて飛んでゆく米空軍部隊の通路にあたっていて、ほとんど連日のようにB 29爆撃機が上空に見えた。最初のうちこそ職員も患者もおどろいたが、いまはすっかり馴れてしまった。一度も爆弾を落としたことはなく、ただ大編隊を組んだまま高々度で通過するだけで、ここを爆撃する気のないことはよくわかつていた。

それがかえって患者たちを失望させていた。治癒するあてもない業病をかかえて生きているよりも、ひと思いに死んだほうがましだという思いは、だれでも抱いていて、あるときは強く、あるときはそれほどでもなくても、一日も消えない思いとなっているからだ。

——今日もやはり、B 29はただ上空を飛び去っただけであった。爆音は次第に高くなって最高度になり、また次第に細って北の空へ消え、あとには何十条もの飛行機雲がいつまでもたなびいていた。

「今日もだめか……」

無事だったことへの嘆息を、びゅうつと鳴るので、秋田弘ももらした。

爆音がなくなると、それまで気にならなかった盲導用のチャイムの音が、いやにはつきりときこえてきた。ミィ、ドの単音を数秒間隔でくりかえすだけの音で、それが耳につきはじめると狂い出しそうな焦燥感をかき立ててくる。

音の出場所回事務本館だ。そこにチャイムがあつて、島内の道の十数か所に設けられた有線放送で放送されていた。盲人は杖とその音をたよりに道をたどる。朝から夜の八時まで、単調な音は鳴りつづけるが、耳馴れないうちは鳴り止んだあとになってもその音が耳の底にこびりついていて、奇妙な

錯乱をおぼえさせられるのだった。

いまも、チャイムの音はきこえていた。ここはたしかに癪療養所であって、お前たちはもう二度と一般社会には戻れない人間たちなのだ……。音は、くどくどとこの島に住む癪者たちに念を押しているかのようにきこえた。

チャイムの音をはつきりと耳にしたとき、鴨下は海にむけていた目を、なだらかに裾を引くいま彼がいる台地に移していた。徐々に目をあげていくと、事務本館の白い鉄筋の建物を中心にして、こまごまと点在する療養所一帯が俯瞰され、その果てに火葬場の煙突が見えた。炊事場の煙突にくらべると、火葬場のそれは数倍も太く高かった。

その煙突は煙突自身が存在の意思を強調するかのようには、忘れたころになるとちゃんと人を焼く煙りを立てた。

そうしてその煙りは、いつのときも数キロの海を距てた本土側へなびいた。

「癪園の煙りがこちらへくる。火葬場の位置をかえさせろ」

そういう要求が療養所へきたことがあって、安心して死ぬことができない、と患者は怒ったが、その後どうなったか火葬場はまだそのままの位置にあった。

どこからのニュースなのか、軽作業の一団のなかから、べつの療養所のできごとが語られていた。

「おれたちなんか、いつときも早く死んじまったほうがいいとかんがえてやがるんだ。国も元氣な人間もそうなんだ」

「ひどいことをしやがる——」とひとりが和したがその声はすぐに低くなって「しかしなあ、死んじ